

# MUSEUM

ミュージアム・アイズ

# EYES

Mm  
MEIJI UNIVERSITY  
MUSEUM

Vol. 64  
2015

特集

## 明治大学博物館の進化形

### — 常設展示室のリニューアルに向けて —



## Contents

- 博物館活動報告 — 伝統的工芸品の経営とマーケティング Vol.9「備前焼の次世代構想」  
特別展「藩領と江戸藩邸～内藤家文書の描く 磐城平、延岡、江戸～」
- 展示&リサーチ — オーソドックスな古文書展示 / オーソドックスな古文書展示・続編
- 学芸研究室から — ガウランドと登山記録 — 記録から足跡をたどる —
- 市民レクチャー — 延岡藩の参勤交代～延岡藩内藤家初代藩主 政樹の「御初入」を中心に～
- 収蔵室から — 前場幸治瓦コレクション 飛鳥時代の軒丸瓦 / 身近な古文書 離縁状
- 南山大学協定通信 / 博物館入館者数の動き / 団体見学の記録 / M2カタログ / 博物館友の会から

※表紙の図面は現在の常設展示室の設計時に使用されたものです。

特集

# 明治大学博物館 の進化形

—— 常設展示室のリニューアルに向けて

2004年4月にオープンしたアカデミーコモン博物館も、この3月末で丸11年が経つこととなります。この間、学術研究は日進月歩で進化し、当館における収蔵資料及びその関連学術分野に関する調査・研究の成果も着実に積み上げられてきました。

こうした動向を展示の解説内容に反映させるとともに、受け入れてきた新たな資料・コレクションを活用することが求められます。また、各地で大学博物館の開館・リニューアルが相次ぐ中、明治大学の個性をより明確にアピールすべく、建学の精神「権利自由」の具現化や学長方針に掲げる教育推進目標の重点施策である国際化の視点を展示に盛り込むことも大切です。そこで、解説パネル・グラフィックパネルを刷新し展示資料を入れ替える常設展示の改修をおこなうことになりました。

来春に予定される改修工事に向け、現在、計画策定が着々と進んでいます。今号では各部門が掲げる改修方針についてご披露します。



どの展示物をどのように展示するか決定するまでには何度も綿密な計画を立てる 左上・上は現在の展示内容の記録

## 商品部門

アカデミーコモン新博物館の開館後、遅れていた商品部門の研究体制は、商学部の先生方との共同による2006年の公開特別講義開催を契機に、翌2007年からワーキング・グループが立ち上がり本格的に始動します。そこでは在学生に最もなじみあ

る種目として陶磁器産業を研究対象とすることになりました。

経済の長期低落傾向の中、伝統的工芸品産業は全体とし



2000年代の動向を追った研究成果発表の展示

て急速な縮小傾向にあります。一方、一方で少量多品種による高付加価値商品として市場を開拓する動向が見られるようになっていました。こうした動きからは、伝統工芸固有の事情としてではなく、将来の国産品製造・販売一すなわち、これからの商品のあり方—に対し有為な示唆を得られるものと考え、流通システムの変質や消費性向の変化に

じた商品開発、ブランドマーケティングなどを切り口に産地研究を実施、特別講義や企画展で成果を発表してきました。

理工学部では、天然漆を改良し工業原料としての使用性を向上させる研究が進んでいました。環境への負荷が少なく耐久性にもすぐれた漆が持続性のある資源として注目されたのです。2007年にその研究成果発表の展覧会を開催したことを契機に連携が始まり、2011年には文学部考古学専攻の先生とも連携して縄文時代の漆文化、現代の漆器商品、次世代機能材料という3つの研究視点から漆を照射した特別展の開催が実現しました。

これらの陶磁器や漆の研究を通して見えてきたのは、近代機械工業の発展と手工業存続の関係性でした。機械工業に手工業が駆逐されるという単純



2011年度特別展における商品部門資料の展示

な図式ではなく、いかなる必然性で手工業は残っているのかという視点です。むしろ大量生産による廉価製品の見通しを考えると、高度経済成長期における旧商品陳列館初期の収集品は終わりゆく一つの時代を象徴し

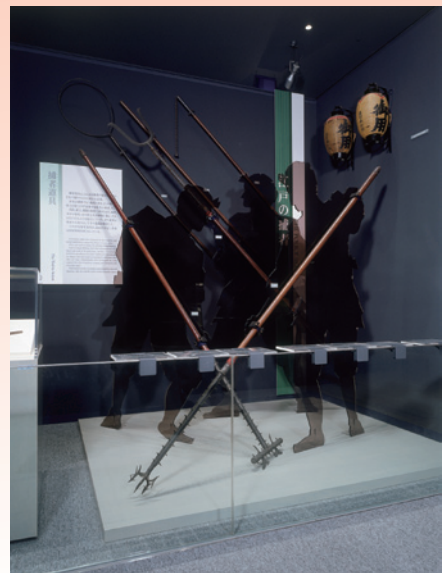
ていると言えます。21世紀を迎えて最初の10年がとうに過ぎ、昭和の時代はもはや歴史として評価を受ける時代になりました。

変化に富む国土と豊かな自然環境に影響を受けた日本の伝統工芸は、これまでも外国から高い評価をうけ、漆器、陶磁器などは輸出品として高いステータスを得ていました。機械工業を至上とし規格化・画一化の中で個性という価値が軽んぜられた時代は終わり、今日、卓越した個性によって世界に独特な地歩を築いた日本の伝統工芸を再認識する機運が高まりつつあります。

常設展示の改修にあたってはこうした動向を反映して展示計画を深化させてゆく予定です。

## 刑事部門

明治大学は法学の普及とそれを担う法曹の養成を目的として、明治14(1881)年に明治法律学校としてスタートしました。そして、昭和4(1929)年に、法学研究において実物実見を重視する立場から、「刑事博物館」を収集する刑事博物館が設立されます。この頃、法学部では、刑罰は受刑者に対する教育を第一とするものであるという教育刑論の重要性を唱えて、刑事政策の講座が設けられています。この様な動向は、過去の刑



捕者三道具

罰を理解しようとする刑事博物館の設立と無関係ではなかったでしょう。2004年に刑事博物館が明治大学博物館刑事部門に改編されてからも、設立時の方針を引き継いで、建学の理念「権利自由」にもとづき、日本における各時代の刑法典、江戸時代の捕者具・刑罰具・拷問具を中心に、明治以降の刑罰具や海外の刑罰具・拷問具まで、法や刑罰にかんする資料を常設展示してきました。大学博物館の展示としては、類を見ない展示であるため、はじめは驚く人もいますが、展示内容をじっくり見学した後は、法律や刑罰の歴史について初めて知った



白洲の図(徳川幕府刑事図譜)

とか、いろいろな事を考える良いきっかけになったという感想が多いです。

刑事部門では、2004年の常設展示室開室以降も館蔵資料の調査・研究を重ね、その成果を館内での展示会や、学外での展示会、シンポジウムなどで公開してきました。このような活動を通じて、常設展示室の主要展示品である戦前に収集された刑罰具・拷問具類については、刑事博物館の初期収蔵台帳の調査によって来歴などが明らかになってきました。また、館蔵資料の中には、江戸時代の村や村人が法や刑罰とどの様に向き合っていたのかを示す古文書が多く含まれている事なども分かってきました。これらの要素を加えつつ、より見やすい展示方法の工夫も重ねて、新しい常設展示室へとつなげて行きたいと思っています。

## 考古部門

最近の10年間の旧石器考古学界では、日本列島全域の旧石

器時代遺跡がデータベース化されるという画期的な仕事がなされました。この成果はぜひ展示パネルに反映したいと思います。明治大学黒曜石研究センターが推進している石器時代の黒曜石研究に関係しますが、中部日本の石器時代遺跡出土の黒曜石製石器に対する原産地推定分析のデータが網羅的に集成されています。このデータを展示に活用し、博物館も研究支援を行っている同センターによる黒曜石の考古・古環境分野共同研究の成果を展示に反映します。縄文時代については、1950年の夏島貝塚発掘にはじまり、それ以降に蓄積されてきた放射性炭素年代測定にもとづく高精細な縄文時代の年代観を新たに紹介する予定です。また、現在の常設展示で紹介している長野県長和町にある星糞峠黒曜石採掘鉱山では、ここ数年で新たな発掘調査が実施されていることから、縄文人の黒曜石地下採掘についての新しい知見を展示に付け加えます。

弥生時代では、明大考古学の原点ともいえる登呂遺跡の出土土器・木器レプリカを加えると



馬形埴輪レプリカの製作

ともに、大型パネルで弥生時代の農耕文化探求の軌跡を示します。また、AMS法による放射性炭素年代の議論をふまえた弥生時代の年代観を反映します。さらに、近年の収集資料である新たな武器形青銅器を常設展示に加えます。古墳時代では、明治大学が取り組んできた古墳研究の成果と近年の研究により明らかになってきた東日本の古墳の出現に関する見解をあわせて紹介します。長年にわたって明治大学が取り組んできた長野県大室古墳群の土器・埴輪類と、茨城県玉里舟塚古墳の馬形埴輪や多彩な人物埴輪とその配列など、この10年の間に進展した研究成果についても実物とレプリカを交えて紹介します。

## お知らせ

常設展示室の改修は2016年の1～3月を予定しています。展示室自体は開室しますが、工事の関係で展示の一部を閉鎖することになります。展示の閉鎖状況につきましては、スケジュールが決まり次第ホームページ上に告知いたします。ご来館の折にはご確認ください。

公開特別講義 伝統的工芸品の経営とマーケティング Vol.9

## 備前焼の次世代構想 —市場動向の変容と新たな商品開発— を開催しました

講師 山本 竜一 氏（備前焼作家・協同組合岡山県備前焼陶友会市場開拓特別委員会委員長）

去る2014年11月14日、大学院商学研究科・商学部と連携し、商学研究科「商品学特論B」、商学部「市場調査論B」「商品学B」の拡大版として、他専攻科・学部の院生・学生や一般社会人の参加を得て特別講義が開催されました。

釉薬を用いずに焼き締める備前焼は、岩肌を思わせるざっくりとした土味が特徴で、“侘び”“寂び”の境地にある道具として茶道の世界で高い評価を得てきました。5人の人間国宝を輩出するなど、日本を代表するやきもの産地です。そうした産地においても、従来のファン層以外に新たな市場を開拓することが喫緊の課題となっています。産地組合では市場開拓特別委員会を組織して生産従事者の意識変革を促し、新たな商品開発と市場開拓の方向性を探りました。一流の工業デザイナーと提携した商品開発によるインテリア・家具業界をターゲットとする販路拡大戦略が披露される一方、在学生の代表者からは新たなデザインの導入と伝統的な持ち味の継承とをどう折り返合わせるかという質問が寄せられました。また、土づくりから作品販売までを作家自身がこなす備前焼は、陶業を目指す者の貴重な修行の場として各地から人が集まってくる、日本の陶業界においても重要な役割を担う産地であることが分かりました。

※この講義の抄録は「明治大学博物館研究報告」20号（2015年3月31日刊行予定）に収録されます。



### 2014 年度特別展

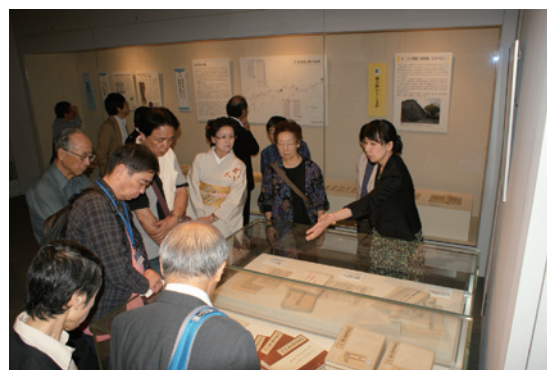
## 「藩領と江戸藩邸 ～内藤家文書の描く 磐城平、延岡、江戸～」が終了しました

2014年10月11日から特別展示室で行われた「藩領と江戸藩邸」展が12月11日をもって、62日間の会期を終了しました。本展示会では、磐城平（延享4・1747年まで）、延岡（延享4年以降）を所領とした七万石の譜代大名内藤家の文書（本館蔵）を取り上げ、磐城平、延岡、江戸という三カ所に存在した内藤藩の城や屋敷を定点として、それぞれの地における内藤藩の姿や江戸と国元における人・もの・情報のやりとりなど、江戸時代の藩の広がりを描きました。さらに、内藤藩領や内藤藩江戸屋敷の歴史を私達に教えてくれる内藤家文書がどのようにして今日まで伝わってきたのか、廃藩置県後の内藤家文書の行方にも迫りました。

展示観覧者の感想には、内藤藩の虎之門屋敷や六本木屋敷などの江戸屋敷絵図、藩主内藤政挙の祖母充真院が江戸と国元を行き来した際の絵入り旅日記などがとても面白かったといった声がありました。また、磐城平領の海岸線を描いた「磐城七浜捕鯨絵巻 浜の巻」（いわき市蔵）は、絵巻に書かれた地名や現在の駅・学校などをパネルに起こし、合わせて展示しました。10メートルを超える長さの絵巻の迫力と共に、このパネルも好評で、いわき市からの来場者にもとても喜ばれました。62日間の展示期間中には、いわき市のほかに延岡市からの来場者もあり、入場者数は3,825名でした。なお、本展示会の記録は、明治大学博物館HP内の「明治大学博物館アーカイブ」e-learningコンテンツとして公開する予定です。



展示風景



展示見学の様子

# オーソドックスな古文書展示 オーソドックスな古文書展示・続編

外山 徹 (商品・刑事部門学芸員)

## 1. あえて古文書の展覧会を

学芸員養成課程の文学部吉田優准教授と共同で、2013年に「オーソドックスな古文書展示」（会期5月25日～6月30日）を、引き続いて昨年6月28日～8月3日の会期で「続編」を開催した。

明治大学博物館には、旧刑事博物館から引き継ぎ、譜代大名内藤家文書を含めて古文書が約19万点所蔵されている。その多くは江戸時代の農村文書である。故木村礎名誉教授の研究室は村落史研究をリードし、ゼミ生は刑事博物館の古文書で卒論・修論を

まとめていた。

企画の背景には豊富な収蔵資料の存在をアピールすることと在学生による古文書利用を再び、という目論見があった。展示の目玉は学生の参画。これにはむしろ普段の勉学の中で古文書に縁のない日本史専攻以外の学生が多く参加した。この試みについては吉田准教授が本誌62号にふれているので、小稿では「古文書の展示」をテーマに持論を述べたいと思う。

吉田准教授が展覧会案内で述べるように、この江戸期の農村文書（実際には近代以降のものも含めた庶民史料）は、考古遺物、民具とともに最も大量かつ普遍的にこの地域にも伝

来する歴史資料である。当然、地域博物館の館蔵資料の多くを占めるので、展示に活用されてしかるべきであるが、その様相はどうか。

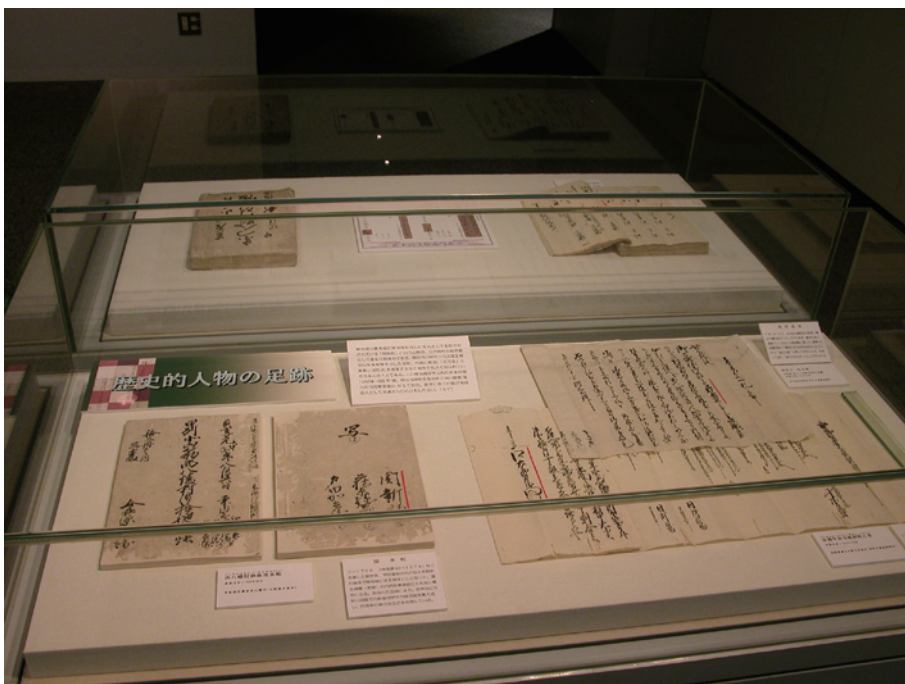
古文書と瓦で語る戦国期と詠むと中世史の担当者にイヤな顔をされるかも知れないが、こと戦国時代を史料の実物で表現しようとする古文書を多用せざるを得ない。この時代における古文書とは、北条氏や武田氏などが発給する文書である。たいてい全文が解説され、内容が解説されている。これはこれで、確かに信玄や氏康が実在し、史実を裏付ける証拠があることの実感がある。

ところが、江戸時代の古文書となるとどうだろうか？ 大名領主の関連のものとはともかく、農村文書を展示する場面はどうなっているのか？ 農民にとっての課役である年貢の紹介には年貢割付状が動かぬ証拠と提示され、農村景観を紹介する場面には村絵図、しかしそれ以外には色々な文書や帳簿が、こういうものがありました程度に並んでいるのが現状ではないか。

## 2. 古文書展示の困難

実際、最も一般的で身近な資料は十分に活用されているとは言い難く、考古遺物や民具に較べて影が薄い。ではなぜ古文書はダメなのだろうか？

最大の障壁は読めないこと。くずし



赤線を付して固有名詞に着目

字で書いてあることである。新聞記事など活版印刷の類であれば明治時代のものでたいていの人は読んで楽しめる。しかし、よく言われる「ミミズののたかったような字」ではお手上げだ。そこで、先述のように古文書の展示には解説文が付くのである。しかし、字数の限られた中世文書であればオーソドックスな手法として有効なのだろうが、江戸期の冊子や巻紙に書いたような類は、肝要な記述をコンパクトに示すことができない。また、たとえ文字が解説されていて、半漢文のような文体は理解に苦しむ。分からないものが提示されているから不人気になるし、そんなものを展示してもしようがない、という論法になってしまう。



史料の文言に現れた物産を展示

### 3. 展覧会での実践

古文書資料を復権させるには、知恵を絞らねばならない。

もう一つ不人気の理由として言えるのは、古文書の展示で説明される内容が見学者自身の知識・経験にシンクロしにくいことである。つまり視点の問題だ。農村文書というのは基本的に行政文書である。そのため、いきおい展示は支配体制という文脈の中で構築される。しかし、実際には、休憩時のタバコの不始末で納屋が焼けてしまったり、村寄合の席で酒を飲むことが禁止されたり、酒乱の親不幸者が勘当を受けたり、といった極めて人間臭い行動も文面に残っている。問題はこのようなことを古文書から解説しても、学界の歴史研究の方法論に添わないのである。古文書展示の企画にあたっては、研究者一般のスタンスからは離れた、生活実感として見学者が自らの知見にシンクロさせ得る、庶民の一手一投足を読みとるといった発想を必要とするだろう。

それから、遺物としての古文書ということを中心したい。記録媒体という抽象的な存在ではなく、それがそこに

あるが故に歴史の存在を実感できる装置として、である。見学者は読めないが故に書かれたものが“文章”として気になってしまうが、冊子のたまたま開いている部分を読んでみても史料全体に関わる内容を理解するのは無理である。

古文書は形態としては、紙に字が書いてあるだけなので、モノ資料のように形状や色彩の意味を問うということは難しい。やはり、見せるべきは“文字”なので、そこで、展示された文章の中の特定の文字だけを注視させることを考えた。特に固有名詞である。人の名前であったり、職業の呼称であったり、あるいは産物の名である。展示の中では蛮社の獄に連座した高野長英の探索を指示する史料を取り上げた。展示された全文を読めなくとも、内容のおおよそを解説文で把握し、その文面に「高野長英」の文字を認めれば、その歴史的人物の実在と境遇を実感できるのである。

甲斐国西八幡村の検地帳は、和算の大家である関孝和がその若き日、甲府藩勘定方役人として検印を押したものである。見学者は孝和が手に取ったであろう土地台帳を遺物として実感するのである。検地帳の史料的意義を述べるのもよいが、現に昔の人が書

いた、作った、使ったものがそこにある、という歴史遺物の存在を実感させることは大事ではないか。

村明細帳にはその村に在住する人々のさまざまな職業や産物も書き上げられている。特定の村の、わずか数百人の人の中にどんな職業があったか、あるいは平均的な農村にどんな作物があったかは、研究者のセンスからすれば取るに足りないものかもしれない。しかし、自家用に栽培していると書いてあるその野菜が、一家の日々の食卓に上ったであろうことを想像するのは、史実としての理解には不十分かもしれないが、見学者としては古文書というものが現代の我々と過去をつなぎ得る存在なのだと思えるだろう。

高度成長期以前の地方の生活を知れば、まだまだ江戸時代は自らの生活の延長線上に珍しくも何ともないものと捉えられるかもしれない。それから半世紀余。江戸時代は確実に遠くなっている。学生諸君の感性もまた変わってきている。彼らが未知の時代の中に現代との相違点、接点を探って一生懸命になっている姿を見ると、着眼点を変えることにより、まだまだ古文書を活用する余地は大いに残されているのではないかと考えさせられる。

# ガウランドと登山記録

—記録から足跡をたどる—

忽那 敬三 (考古部門学芸員)

## はじめに

明治時代初期、政府や民間は日本の産業や教育の振興を目的に海外から技術者や研究者を数多く招聘した。いわゆる「お雇い外国人」である。著名な人物としては、北海道開拓学校のクラークや大森貝塚を調査したモースなどが知られており、実に数千人もの外国人が招かれ、日本の近代化に寄与したといわれる(梅溪1968)。明治維新から間もなく、幕末期に混乱した経済を立て直すために新政府が当時の国家税収の3割もの資金を投じて大阪に建設した造幣寮(1871年に造幣局と改称)にも、その運営のため局長以下31名の外国人が雇用された。そのうち、化学兼冶金技師として名を連ねたのがイギリス人のウィリアム・ガウランド(William Gowland。ゴーランドとも呼ばれる。1842-1922)だ。ガウランドは銅の製造を専門とする技師であり、王立の化学専門学校や鉱山専門学校で学び、マンチェスターのプロートン製銅所の技師を経て1872(明治5)年、30才の時に来日した。多くの外国人が数年で日本を去る中、ガウランドは契約の更新を重ね、造幣局長顧問、試験方、熔解所長、陸軍砲兵工廠顧問を歴任し造幣局の首席外国人として1888(明治21)年に帰国するまで、実に16年間にわたり日本の製銅技術の向上と技術者の育成に力を注いだのである。

本業である造幣局での功績とともに知られているのが、登山と古墳研究である。鉱石などの地質調査や余暇の目的で山に登る機会が多かったガウランドは、日本アルプスの命名者として知られている。また、日本の406基の古墳を調査し、そのうち140基の図を作成したと自身の論文で述べており(Gowland1897)、帰国後に日本の古墳に関する論文を発表した。

ガウランドはこうした本業以外の部分でも高く評価されているのだが、登山についても、また古墳の研究についても、正確な時期が判明していないものが多く、また知られているもののなかに根拠が明確でないものがあることが明らかになりつつある。以下では、ガウランドにかかわる登山史について整理を試み、ガウランドの行動と研究の方向性の変遷を考えてみたい。

## 1. 登山史上の問題点

表1は、登山史に関する資料から作成した、ガウランドの登山記録の一覧である。ガウランドは日記を残していないために、行動記録は関連する文献と、造幣博物館が所蔵する出張記録など間接的なものに拠らざるをえない。

これによれば、来日翌年の1873年に外交官のアーネスト・サトウ(1843-1929)ほかと六甲山へ登り、同年に造幣寮の同僚であるディロンと早くも御岳に登山したことに

なる。さらに1875年から1880年まで連続して富山・長野・岐阜周辺の山々の登山が行われたとされる。ただし、小島烏水は1878年の槍ヶ岳登頂が外国人初登頂と述べていることから、前後との重複等を考慮しなければならない。そして1881年以降は極端に関係記事が減り、帰国した1888年の乗鞍・御岳登山のみとなる。また、詳しい年代はわからないが、鳥海山、日光連山にも登ったという(布川2005)。

## 2. 旅行・出張記録との照合

まず1873年の六甲山登山であるが、克明な記述があることで知られるサトウの日記には触れられていない。可能性があるとするれば前年末から新年にかけての関西旅行期間中であるが、ともに参加したとされるアトキンソン(造幣寮のGeorge Atkinsonか?)や高岡要(サトウの日本語教師)が同行した記録も確認できない。同年のディロンとの御岳登山、1875年の立山・ヤケヤマ(焼山?)は、イギリス地学協会の議事録に記事がある(生駒1988、庄田1992)。また、日本アルプスの登山史で取り上げられることが多々ある1875年のサトウとの御岳・乗鞍岳登山については、サトウが同年2月から約1年間帰国して不在であったことが明らかであるため(開港資編2001)、誤認である可能性が高い。特にガウランドとサトウがともに登山を行った記録はサト

表1 ガウランドの登山記録

西暦	明治	月日	登山記録
1873	6		サトウ・アトキンソン・高岡要と六甲山登山(安川1969、生駒1988)、ディロンと御岳登山(生駒1988ほか)
1875	8	7月	サトウと御岳・乗鞍岳登山 造幣局の大野が随員(安川1969)、ディロンと立山・ヤケヤマ(焼山?)登山(生駒1988、庄田1992)
1876	9	夏?	ディロンと爺ヶ岳と五六岳(蓮華岳)登山(渡辺氏教示、山崎1984)
1877	10	7月28日	ディロンと槍ヶ岳・乗鞍岳登山(山岳会編纂委編2007、布川2005)
1878	11	7月28日	槍ヶ岳に外国人初登頂(小島1936、小泉2001、安川1969、遠藤・池田編2005)
1879	12	夏	立山・爺ヶ岳・五六岳登山(小島1936)、立山・爺ヶ岳(爺ヶ岳)・五六岳・乗鞍岳・御岳登山(小泉2001)
1880	13	7月18日	ディロンと爺ヶ岳～五六岳登頂(山岳会編纂委編2007) 12/14の日本アジア協会「日本における氷河時代の遺跡」講演会でガウランドが妙高山・焼山・立山・爺ヶ岳(爺ヶ岳)・五六岳・槍ヶ岳(7月28日)・乗鞍岳・御岳を既に登頂したと、ミルンが述べる 鳥海山・月山にも登った可能性あり(山崎1984)
1888	21		乗鞍岳・御岳登山(小島1936)、12月帰国



ウの日記や他の資料にも記述がないことから、慎重に考える必要がある(注1)。

このように裏付けが難しい記録が多いなかで、確実なものは1877年7月の槍ヶ岳・乗鞍岳登山で、飛騨高山まちの博物館が所蔵する『明治九年至同十七年宿泊人届 旅行外国人止宿届 丁第三三号 高山町』のうち、明治10年7月20日付「神岡村上宝村へ通知文書控」には、ガウランドとディロンが地質調査のため登山することが明記されている。また、日付から考えても7月28日頃に登った可能性が高いことから、山崎安治が既に指摘しているように小島烏水が1878年の槍ヶ岳の外国人初登頂としたものは1877年の誤りであるとみられる(山崎1984)。78年、79年の記録についても裏付けとなる資料はなく、不確定である。しかし、1880年12月14日の日本アジア協会で、ガウランドがこの時点までに妙高山・焼山・立山・爺岳・五六岳・御岳に既に登っているとジョン・ミルンが述べていることから、いずれかの記録は該当するものと思われる。

このように、登山記録は不明確な部分が多い。そこで、公的な事務文書として保存されている造幣局の旅行・出張記録から補強を試みたい。現状で確認できる行先が確実な旅行・出張記録は表2の通りである。近隣の大阪府内や兵庫、京都に赴く際も旅券が必要であったことがわかる。今のところ、1873年の旅行・出張記録は見当たらない。最も古い記録は1875年で、年末から年明けにかけて大阪・奈良・和歌山近辺を訪れているのみである。東日本へのお出張記録は少ないが、その後の申請を見ると、東日本へ長期で旅行する場合は7、8月の夏休み期間が多く、実際には赴いていたが記録が失われている可能性もある。1876年の夏はディロンと東京、日光、山形、福島、宮城と東北地方にまで足を伸ばしている。翌年に槍ヶ岳・乗鞍岳とともに登ったディロンと一緒にいることから、日光連山、鳥海山登山はこの時であったのであろう(注2)。年末には奈良・三重・和歌山・滋賀・岐阜へ自然科学調査目的で行っているが飛騨ではなく美濃と記されていることと、雪深い冬山で調査を行ったとは考えにくいから、当該年のディロンとの爺ヶ岳ほかの登山は夏の帰途か、あるいは別の年ではないかとみられる。

1877年は飛騨・信州を含む地質・風土調査目的の出張申請があり、飛騨高山まちの博物館所蔵文書と対応させることができる。1878年夏も信濃を含む出張申請を出しており、この年も槍ヶ岳周辺を訪れているようである。翌79年は行先不明の旅券返却報告があり、登山に行っている可能性は残されている。さらに1880年夏も岐阜が含まれているので、爺ヶ岳・五六岳を訪れたかもしれない。最後の1888年については、3月に近畿と瀬戸内を中心とした出張申請のみであった。

### おわりに

以上のように、造幣局所蔵資料と対応させた場合、確実なのは1877年の登山記録であり、他は76年、80年のものが可能性が高いといえる。1880年前後は登山記録及びそれと対応する東日本へのお出張記録が減っていく一方で、近畿・西日本へのお出張記録と古墳の調査記録が増えていく時期にあたる。紙幅の関係で古墳の調査記録の推移に触れることはできなかったが、このような登山記録の変化からも、ガウランドの関心が登山から古墳研究へと移り変わっていくことを窺うことができる。古墳の調査記録との比較は、また稿を改めて示すこととしたい。

本稿は、大英博物館所蔵資料の総合的な調査を目的とした日英共同調査グループ Gowland Project および科学研究費(基盤研究(B))「ゴウランドの古墳研究の総合的検証と古墳文化に対する国際的理解への活用」研究代表者:京都橘大学一瀬和夫、課題番号 24320160)で得られた成果の一部をもとにしている。また、上田耕造氏、富山直人氏、渡辺英時雄氏のほか、社団法人日本山岳会、造幣博物館、飛騨高山まちの博物館の各個人・団体・機関に多大な協力とご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

注1 筆者が「ガウランドと明治期の古墳研究 展示概要」(2014)に掲載した1873年と1875年のガウランドとサトウの登山記録について渡辺英時雄氏より指摘を受けた。資料を検討した結果、十分な根拠が確認できなかったため、撤回して訂正する。

注2 1881年夏にも北陸道から奥州街道経由で北海道まで行っているが、ミルンによる学会発表は1880年であるので、やはりこの年である可能性が高い。

表2 旅行・出張記録  
(造幣博物館蔵、上田2014を一部参考に筆者作成)

西暦	日付	旅行・出張記録
1875	12/25、26	奈良と周辺
	年末年始	摂津、丹波、丹後、但馬、播磨
	年末年始	河内、和泉、大和、紀州、12/1申請の行先変更?
1876	4/2、3	奈良とその周辺
	6/30~8/15	東京、日光、羽前、久保田、若松奥州街道経由、仙台→東京、東海道か中山道経由で大阪
	10/15(日)	京都
	11/23	京都、奈良
	12/23~25	京都、奈良
1877	12/27~1/3	大和、伊勢、紀州、美濃、近江
	夏休み	北陸道、中山道、越後、信州、東海道、飛騨、大和、紀州、甲州
	9/15~17	大和
	11/2~4	京都
	11/18(日)	京都
1878	12/29~1/3	京都と周辺
	3/24	京都
	4/3	京都
	5/26	京都
1879	6/30(日)~8/15	新潟、佐渡、東京へ戻ってから信濃 中山道か東海道か北陸道を通して伊勢、紀州、大和、生野
	12/25~1/5	京都、兵庫、堺、和歌山、三重、滋賀、岐阜、愛知
1880	7/1~8/1	四国、大和、伊勢、紀州、兵庫、広島、石川、滋賀、岐阜、愛知、京都
	12/21~1/5	四国、大和、伊勢、紀州、兵庫、広島、島根、岡山、滋賀、岐阜、石川、愛知、京都
1881	7/1~8/15	東海道か中山道か北陸道→奥州街道→大阪→北海道(蝦夷) 京都、大阪、兵庫、和歌山、三重、四国
1882	12/24~1/4	大阪、京都、福井、滋賀、岐阜、愛知、三重、山陰道、山陽道、南海道
1887	12/24~1/5	大阪、高知、京都、岡山、奈良、滋賀、和歌山、岐阜、兵庫、愛知、徳島、愛媛、福井、三重
1888	3/28~4/4	大阪、京都、奈良
	3/27~4/4	大阪、愛媛、京都、岡山、奈良、兵庫

### 参考文献

生駒勤七1988『御嶽の信仰と登山の歴史』第一法規出版/上田耕造2014「『局中外国人来書』を読み解く②」『時報』11月号 独立行政法人造幣局/遠藤甲太・池田常道編2005『日本登山史年表』山と溪谷社/梅溪 昇1968『お雇い外国人』1 鹿島研究所出版/小泉武英2001『登山の誕生』中公新書1592 中央公論新社/小島烏水1936『アルピニストの手記』書物展望社/庄田元男1992『日本旅行日記』1 平凡社/日本山岳会百年史編纂委員会編2007『日本山岳会百年史(続編・資料編)』社団法人日本山岳会/布川欣一編2005『目で見ると日本登山史』山と溪谷社/安川茂雄1969『近代日本登山史』あかね書房/山崎安治1984『登山史の周辺』茗溪堂/横浜開港資料館編2001『図説 アーネスト・サトウ』有隣堂/Harris,V 後藤和雄責任編集2003『ガウランド 日本考古学の父』朝日新聞社、大英博物館/Gowland,W 1897 The Dolmens and Burial Mounds in Japan, Archaeologia Vol.55

# 延岡藩の参勤交代

～延岡藩内藤家初代藩主 政樹の「御初入」を中心に～

増田 豪 (延岡市 内藤記念館 主任学芸員)

## 参勤交代とは

江戸時代において、全国各地の大名が自らの領国と江戸を行き来する参勤交代制は、寛永12年(1635)6月の武家諸法度第2条において「大名小名在江戸交替所<sub>ニ</sub>相定<sub>ニ</sub>也。毎歳夏四月中可<sub>レ</sub>致<sub>ニ</sub>参観<sub>ニ</sub>」(『大猷院殿御實紀』)と規定されたことによって制度化されたと考えられている。「夏四月中」とあるように、この条文により交代の時期を4月として、西国大名が江戸に参府すると東国大名が領国へと帰国し、翌年、東国大名が参府すると西国大名が領国に帰国するという体制が成立するが、この時点では、あくまで外様大名を対象とした制度であり、内藤家のような譜代大名や、それまで対象外であった関八州内の大名に対し参勤交代が命じられるのは、7年後の寛永19年のことである。

譜代大名も参勤交代の対象となったことで、江戸と領国とを往復する参勤交代制は、全国の大名を対象とした支配制度となったと言えるが、延岡藩の参勤交代については、これまでほとんど明らかにされてこなかったところである。

そこで小稿では、内藤家入封以前の延岡藩の参勤交代の状況を概観すると共に、磐城平藩から延岡藩への領地転封から2年後となる寛延2年(1749)に行われた、内藤家としては初代延岡藩主となる政樹の「御初入」を中心に、延岡藩の参勤交代について紹介することとする。

## 内藤家入封以前の延岡藩の参勤交代

内藤家が入封する以前の慶長19年(1614)から元禄4年(1691)まで延岡藩主であった有馬家の藩史である『国乗遺聞』には、「御参勤御往来之事」として、延岡藩時代の有馬家の参勤交代の様子が記されている。そこからは、元々4月であった参勤の時期が6月へと途中で変わったこと、また、出立となる「御発駕」の日については、2月20日～25日の間の吉日を選んで「御乗船」、つまり海路を用いて出立していたことなどを確認することができる。

参勤時期の変更については「其歲月ヲ詳ニセス」と記されているように、変更時期やその理由については不詳である

が、貞享2年(1685)に藩主・永純が雁間詰となり、譜代格として扱われるようになったことによる変更である可能性を指摘することができるだろう。

一方、江戸から領国へと戻る「御暇<sup>おいとま</sup>」(ルビ筆者)に際しては、4月初めに延岡へと「江戸御発駕」の日時が知らされ、江戸から大坂迄の陸路は13日、そして大坂から延岡までの海路を12.3日と計算して、帰国する藩主の船団を確認するための見張りの場所や体制を整えると共に、船団を確認すると、狼煙<sup>のろし</sup>などを用いて延岡城下へと素早く情報を伝達していた様子を窺い知ることができる。

参勤交代にかかる日数としては、内藤家文書で確認することのできる期間と比較すると、有馬家の船団の海上航行能力の優秀さを示すものなのかもしれないが、海路については天候が良好であることを前提とした、非常に速いペースを想定していると言える。しかしながら、情報伝達の手法については、「万覚帳」寛延2年7月21日条(内1-7-37)に記された「牧野備後守様初而御入府之節」に見える方法とほぼ同一の内容であることが確認され、こうした参勤交代に関わる情報伝達の手法等も、藩主の入転封の際に引き継がれていたことがわかる。

また、有馬家が延岡藩主であった時代の城下の様子を描いた「延岡城下図屏風」には、こうした藩主帰国の情報を受け取った藩士達が、「自分船ニ館ヲ拵



「延岡城下図屏風」(右隻)部分 一般社団法人きよたか美術館所蔵

へ鎗ヲ筋リ」出迎えた」と記す『国乗遺聞』の内容と概ね一致する場面が描写されており、当時の参勤交代の様子を窺う上でも、本屏風は貴重な資料と位置付けることができる。

しかしながら、『国乗遺聞』などの史料からは、有馬家がどのようなルートを用いて参勤交代を行っていたのかというような具体的な記述を確認することはできず、また、有馬家の後に延岡藩主となる三浦家、牧野家の時代についても、伝存する史料の制約等もあり、その詳細を窺い知ることができるようになるのは、内藤家の時代になってからと言える。

### 内藤政樹の延岡初入国

内藤政樹に対し、延岡への転封が告げられたのは、延享4年(1747)3月19日のことである。「けふ牧野備後守貞通封を転じて。日向国延岡より常陸国笠間城にうつる。井上河内守正経は笠間より陸奥国岩城平にうつり。内藤備後守政樹は岩城平より延岡の地にうつる。』(『惇信院殿御實紀』)として、牧野家、井上家、内藤家の三家間での領地の入れ替えが命じられ、旧領の引き渡しと、新領の受け取りが慌ただしく行われることになるが、新たに延岡藩主となった内藤政樹が延岡に初入国を果たすのは、それから3年後の、寛延3年(1750)1月4日のことである。

寛延2年の「万覚帳」(内1-7-37)によると、本来であれば6月14日に他の大名と共に「御暇」、つまり領国への出立が許可されるはずであったが、夏の暑さの影響で「御眩暈」(ルビ筆者)などを伴う体調不良に陥った政樹に対し、正式に「御暇」が許されたのは、将軍家重に拝謁した同年10月30日であり、これが通常とは異なる到着日となった理由と言える。

将軍拝謁を終え、11月15日ようやく発駕することになる政樹であるが、7月21日条の記述からは、海路をはじめ、磐城平藩時代とは異なる、全く新しいルートとなる延岡との往来に際し、前の藩主である牧野家の「御初入」の状況を確認し、

【表】寛延2年(1749) 延岡藩参勤交代(江戸→室津)の予定行程表

日数	予定日	宿駅	目的	移動距離	
1日目	11月15日	江戸	発駕	—	—
		川崎	御休	4里18丁	17.7km
		程谷	御泊	3里27丁	14.7km
		8里9丁		32.4km	
2日目	11月16日	光明寺	御泊	6里程	23.6km
		6里程		23.6km	
3日目	11月17日	江島	御休	3里	11.8km
		藤澤	御泊	2里	7.9km
		5里		19.6km	
4日目	11月18日	大磯	御休	4里9丁	16.7km
		小田原	御泊	4里	15.7km
		8里9丁		32.4km	
		箱根	御休	4里8丁	16.6km
5日目	11月19日	沼津	御泊	5里10丁	20.7km
		9里18丁		37.3km	
		蒲原	御休	7里13丁	28.9km
6日目	11月20日	江尻	御泊	4里14丁	17.2km
		11里27丁		46.1km	
		岡部	御休	6里18丁	25.5km
7日目	11月21日	金谷	御泊	4里34丁	19.4km
		11里16丁		44.9km	
		袋井	御休	5里33丁	23.2km
8日目	11月22日	濱松	御泊	5里25丁	22.4km
		11里22丁		45.6km	
		新居	御休	3里30丁	15.0km
9日目	11月23日	御油	御泊	7里34丁	31.2km
		11里28丁		46.3km	
		岡崎	御休	4里14丁	17.2km
10日目	11月24日	鳴見	御泊	6里24丁	26.2km
		11里2丁		43.4km	
		1日平均移動距離		32.6km	

※1 本表は、内藤家文書「万覚帳」寛延2年10月15日の記述(内1-7-37)ならびに「万覚書」寛延2年11月19日(1-6-補14)の記述に基づき作成した。

※2 距離の換算については、「度量衡法」(明治24年3月23日公布法律第3号 現在は廃止)に従い個別に換算し、小数点第2位を四捨五入したため、一日の移動距離の換算値が、宿場間の距離の合計値と一致していない場合がある。

乗船することとなる室津(兵庫県)まで御舟奉行2人を延岡から迎えに行かせるべきかということや、渡海の際に祈祷のため乗船させる社人を、藩領内のどの神社の社人にするかというような事細かな点に至るまで、事前に準備を進めている様子を窺い知ることができる。

また、藩財政全体の中で占める割合は小さいものの、それでも多額の費用を必要とすることが指摘されている参勤交代の経費について、この「御初入」では、10月23日の時点において「御入用金三千両」の経費が想定され、その資金調達のために出立直前となる11月11日まで資金繰りに苦労する藩の様子もまた、「万覚帳」の記述から見る事ができる。

こうした中、政樹は【表】に示したように10月15日に決定された予定の行程どおり、11月15日に発駕し、内藤家の菩提寺である鎌倉(神奈川県)の光明寺へも立ち寄りながら、東海道を1日平均約32.6kmの移動速度で、西へ西へと移動することとなる。当初の予定どおり、12月2日に大坂に到着してから5日間同地に滞在し、12月7日に大蔵谷(兵庫県)、そして12月9日には室津で乗船し、以後、

日数	予定日	宿駅	目的	移動距離	
11日目	11月25日	宮	御休	1里30丁	7.2km
		桑名	御泊	7里	27.5km
		8里30丁		34.7km	
12日目	11月26日	四日市	御休	3里8丁	12.7km
		関	御泊	7里	27.5km
		10里8丁		40.1km	
13日目	11月27日	土山	御休	4里6丁	16.4km
		石部	御泊	6里7丁	24.3km
		10里13丁		40.7km	
14日目	11月28日	草津	御休	3里	11.8km
		大津	御泊	3里18丁	13.7km
		6里18丁		25.5km	
15日目	11月29日	伏見	御泊	4里8丁	16.6km
		4里8丁		16.6km	
16日目	12月朔日	枚方	御泊	5里	19.6km
		5里		19.6km	
17日目	—	大坂	御着	7里	27.5km
		7里		27.5km	
18日目	—	西宮	御泊	5里	19.6km
		5里		19.6km	
19日目	—	兵庫	御休	5里	19.6km
		大蔵谷	御泊	5里	19.6km
		10里		39.3km	
20日目	—	加古川	御休	3里18丁	13.7km
		御着	御泊	4里18丁	17.7km
		8里		31.4km	
21日目	—	鵜	御休	4里18丁	17.7km
		室津	乗船	—	—
1日平均移動距離				32.6km	

瀬戸内海を利用した海路による移動となるが、この「御初入」における海路の行程については、現在のところ確認できていない。しかし、安永3年や寛政6年の「御参府御船中日記」(内1-11-35, 内1-11-43)からは、海路における参勤交代の詳細な様子を窺うことができ、この「御初入」においても概ね、同様のコースを用いて延岡への途に就いたものと推察される。

参勤交代が、江戸時代の政治や文化、社会に様々な影響を与えたことについては改めて指摘するまでもないが、こうした参勤交代の具体的な事例を確認し、その実態を明らかにする上で、内藤家文書は大きな可能性を秘めた史料群であると言えるだろう。



「御参府御船中日記」安永3年(内1-11-35)

## 前場幸治瓦コレクション 飛鳥時代の軒丸瓦

日本の瓦作りは、6世紀末（飛鳥時代）の飛鳥寺（法興寺）造営を契機に始まります。飛鳥寺は、崇仏派の蘇我氏によって建てられた日本最古の寺院ですから、本格的な仏教信仰に伴って（私宅の仏殿で仏像を祀るというような信仰方法は、これ以前にもありました。）、瓦作りの技術が大陸から入ってきたと考えられます。『日本書紀』崇峻元年（588）の記事には、朝鮮半島の百済から、寺院造営における各方面の技術者と共に瓦作りの技術者が渡来したと記されていて、事実、飛鳥寺の軒丸瓦の文様は百済のものと同様です。一塔三金堂式という日本では他に例の無い伽藍配置も、類似するものが百済の王興寺跡で確認されています。

飛鳥寺に始まる瓦作りは、その後大和を中心に各地で行われるようになりますが、時期が下るに従って軒丸瓦の文様は変化していきます。初めは、飛鳥寺で採用された「素弁蓮華文」という文様（第1図）です。

次に、山田寺に代表される「単弁蓮華文」という文様（第2図）が現れ、さらに、川原寺等の「複弁蓮華文」という文様（第3図）が出現します。「複弁蓮華文」は、日本初の瓦葺宮殿である藤原宮でも採用され、奈良時代以降も使われ続けます。

大まかに言えば、蓮の花の花弁をシンプルに表現する手法から、華やかに表現する手法への変化ですが、この違いは、寺院研究においては、造営年代を探る上での考古

学的指標として扱われており、重要な意味を持っています。

例えば、最も古式の「素弁蓮華文」軒丸瓦は、中国の南朝を起源として百済・新羅に伝わり、日本最古の寺院である飛鳥寺で採用されました。この文様の軒丸瓦が出土する寺院は、大和国を中心に、日本各地にも点在しますが、それらは日本最古段階（6世紀末から7世紀前半）の寺院と判断されます。

また、「単弁蓮華文」軒丸瓦は、舒明朝の百済大寺（吉備池廃寺）が初出で、中国・朝鮮での例はなく、仏像の光背や台座の文様との共通性が指摘されています。舒明13年（641）に蘇我倉山田石川麻呂によって発願された山田寺で多用されたため、山田寺式とも呼ばれます。この型式は、下総国等集中的に分布する地域があることがわかっていて、それらは7世紀中頃から後半にかけて建てられた寺院と捉えられています。

川原寺に代表される「複弁蓮華文」軒丸瓦は唐を起源にしていると言われますが、蓮弁の表現方法や外側に鋸歯文と呼ばれるギザギザ模様が入る等の違いも見られます。むしろ、仏像の光背や台座との共通性を考えるべきでしょうか。川原寺は、天智天皇が、母である斉明天皇の冥福を祈って、川原宮（655～656）を寺としたことに始まると考えられており、純粋な川原寺式軒丸瓦は7世紀後半に位置づけられます。

（森本 尚子）



第1図 素弁蓮華文軒丸瓦（新羅）



第2図 単弁蓮華文軒丸瓦（海会寺）

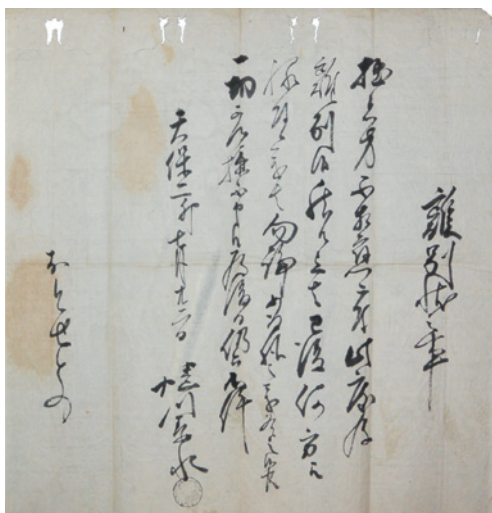


第3図 複弁蓮華文軒丸瓦（川原寺）

# 身近な古文書 離縁状

明治大学博物館刑事部門には数多くの史料が保存されていますが、収蔵室の中で最も収蔵スペースを取っているのは古文書です。刑事部門の所蔵する古文書は内藤家文書とその他武家・寺社・商家・農村など様々な文書があり、中でも農村文書が多くを占めています。しかし、農村文書は耳慣れない、どんなものがあるのか知らない、という方も多いのではないのでしょうか。多くの場合、大学関係者や地方自治体の市史編纂などに利用されていますが、利用は研究職の方に限る、というわけではありません。どなたでも手に取ってご覧いただくことができます。古文書を読んで歴史を身近に感じてみませんか？

まず、刑事部門にはどんな古文書があるのか。それを知るには目録です。刑事部門では前身の刑事博物館時代から含めて数多くの目録を発行しています。『内藤家文書目録』や『明治大学刑事博物館目録』はミュージアムショップで販売されています。また博物館図書室で閲覧も可能です。目録を斜めに見ていくだけでもバリエーションに富んだ文書が収蔵されていることが分かります。行政文書も多いですが、中には訴訟やお詫び、結婚や離婚など、遠い昔に生きた人々の生活を実感できるものも多く含まれています。今回はその中で『明治大学刑事博物館目録』に収録されている古文書を1点ご紹介します。



『明治大学刑事博物館目録』第1号  
書状の部 D 詫状・結婚・離婚等 12「離別状之事」

表題からわかるように「離婚についての文書」です。近世の離婚と言うと俗にいう「三行半<sup>みくだりはん</sup>」が有名です。三行半は夫から妻に渡す体裁をとった離縁状で、これがないまま再婚すると重婚とみなされ罪になります。三行半とは長らく夫権社会や男尊女卑の象徴のような印象を持つ単語として扱われてきましたが、近年の研究により、離縁状を妻に渡すことは「権利」ではなく「義務」であるという見解が出されています。再婚の際にもめることを防ぎ、仲人（仲裁人）をたてて双方熟談の上の協議離婚という形をとっている点は現代にも通ずるものがあります。この文書は三行と半分というには最後の行が少し長いですが、一般的な離縁状の形態だと言えます。離縁の理由から始まり、「今後、どこの人と再婚しても一切構わない」という文言が見られます。つまり、離婚の事実と再婚の承認が一緒になっている文書なのです。宛名は夫から妻へととなっている点もオーソドックスな離縁状の体裁です。

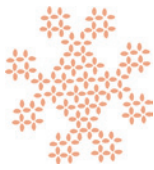
先にも少し書きましたが、この様な古文書は一般に公開されています。閲覧申請を行い必要な手続きを取ればどなたでもご覧いただけます。詳しくは明治大学博物館ホームページ「図書・古文書の利用」をご覧ください。

古文書はそのほとんどがくずし字で書かれていますので、解読には時間と読解力を必要としますが、くずし字の解読テキストや辞書なども多く販売されていますので参考になります。明治大学博物館友の会にも古文書を学ぶ分科会がありますが、その他古文書を勉強できる講座が各所で開かれています。昔の人の生活を身近に感じることでできる古文書、研究や生涯学習にぜひ活用してみてください。

(松尾 藍)

## 【参考文献】

- ◆高木侃 2012「縁切り一筋45年—離縁状八題」『専修大学今村法律研究室報』No.57
- ◆高木侃 2001『泣いて笑って三くだり半 男と女の縁切り作法』教育出版



2013年度から始まった明治大学博物館と南山大学人類学博物館の第2次協定事業は、2年目を迎えました。南山大学では、当館が所蔵する弥生時代の再葬墓出土資料を展示し、「東日本の再葬墓」というテーマで10月3日に学生向けの講義を、翌4日に一般向けのギャラリートークを行い合計37名が参加しました。また、明治大学ではタイ北部の少数民族の女性の衣服を展示し、10月18日のギャラリートークに21名、12月8日の銅鐸形土製品に焦点をあてた公開講義では44名の参加がありました。今回は、当館で展示した南山大学人類学博物館の資料について紹介します。(忽那)

## 「これがわたしのお気に入り～タイ北部少数民族の女性の衣服～」

タイ北部には標高1000mを越える山々が連なっており、そこには10ほどの少数民族が生活しています。今回の企画展には、これらの民族のうちユーミエン族・モン族・アカ族・リス族の女性の衣服を出品しました。

麻や綿を育てて糸を得、染織し、衣服を縫いあげるとは、女性たちにとって大切な仕事の一つでした。一着の服を仕上げるために一年を費やすこともありました。しかし、昨今では市販の布や既製品の服が簡単に手に入るようになったことなどから作り手が減少し、それに伴い従来の技法による衣服が作られなくなりつつあります。現に、資料収集地の一つであるパドゥア村では、住民の大半が従来の衣服を着用しなくなっています。普段は、タイの平地に住む人々と同様の衣服を着用し、昔ながらの衣服を身に纏うのは結婚式などの特別な時だけになりました。

参考文献：森部一・竹野富之2011「北タイの山地民ユーミエン(ミエンあるいはヤオ)族の社会・文化変容—Phadua村とPangkha村の調査から—」[南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告第5冊 南山大学人類学博物館所蔵民族誌資料の研究]南山大学人類学博物館



**ユーミエン族** 中国湖南省に起源をもつとされ、タイ国内へは19世紀後半に移ってきました。衣服に施す幾何学模様の刺繍が広く知られており、研究者によって技法の解説書が出版されるほどです。

**モン族** 中国から東南アジアへ移り住んだのは、18世紀初頭とされています。青モン族の女性が着用するプリーツスカートには、ろうけつ染の布が使用されています。

**アカ族** 元はチベット、ミャンマー北部に住んでいた民族で、1930年代前後にタイ国内へ移住してきました。衣服の装飾として、数珠玉や銀貨などを縫い付けます。また、女性は銀をふんだんに使った頭飾りを着用します。

**リス族** 民族の起源はチベットであったと推測されています。女性の上衣の首周りや肩に施された縞模様は、細長い布を一本一本縫い合わせて作られています。色とりどりの布で作られた縞模様は、さながら虹のようです。



(南山大学人類学博物館学芸員 西川由佳里)



展示の様子  
左から、ユーミエン族・モン族・アカ族・リス族の女性の衣服



ユーミエン族の刺繍が入ったズボン

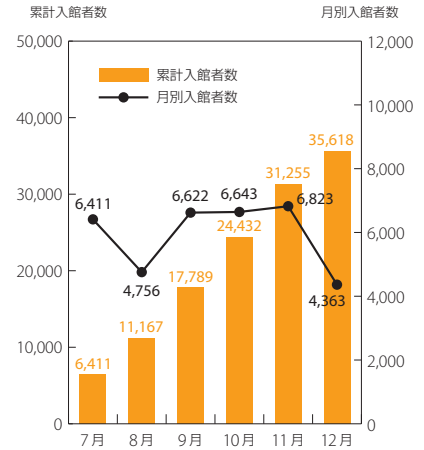
ユーミエン族の女性は、10歳前後から、自分用のズボンを作るために刺繍を練習し始めます。母親や近所の年長者を手本に、見よう見まねで刺繍の技法を習得していきます。彼女たちは日常的に刺繍に励み、とりわけ12月から2月までの農閑期によく行います。刺繍は糸を裏から刺して作られ、表面からだけでなく、裏面から見ても図柄が成立するようになっていきます。刺繍には、装飾として美しいというだけでなく、衣服の傷みややすい部分を補強できるという実用的な利点もあります。

## 博物館入館者数の動き (2014年7月～12月:延べ人数)

2004年4月以降の  
総入場者数累計 **700,305人**

7月～12月	延べ人数
図書室利用者	3,262
教室等利用者数	1,418

特別展示室来場者内訳		開催日数	来場者数
9/6～9/28	ウィリアム・ガウランドと明治期の古墳研究	23日間	2,420
10/11～12/11	特別展 藩領と江戸藩邸	62日間	3,825



## 団体見学の記録 2014年7月～12月

※事前に見学のお申し込みをいただいた団体のみ掲載しております。

- 【一般】** NHK学園くにたちオープンスクール (15名) / 麻生夢会 (20名) / 巣鴨朋友会 (25名) / 千葉県東中PTA研修部 (40名) / 千葉県生涯大学校卒業生 福祉科 35期会 (25名) / 生涯歩こう会 (3名) / いてふの会 (11名) / 柏市防犯協会 土南部支部 (23名) / 所沢高齢者大学サンマルコ会 (8名) / 宗教法人 月窓寺 役員会 (20名) / NHK文化センター 横浜教室・千葉教室 (22名) / いわき市立錦公民館市民講座 (25名) / NHK文化センター 青山教室・ユーカリが丘教室・前橋教室 (22名) / 野田古文書仲間 (10名) / 紫懇会 (27名) / 下総郷土史研究会 (40名) / 歴史研究会 (17名) / 高井戸自主グループ交流会 (9名) / 足立歴史サークル (14名) / 歴史を訪ねる会 (20名) / 八千代市社会科教育研究部会 (20名) / 千葉県生涯大学校卒業生学習会 (53名) / 土曜あしの会 (20名) / ぶら友22 (12名) / 日本セカンドライフ協会 (32名) / 府中市文化センターあり方検討協議会 (25名) / モンゴル統計局 (8名) / 東京都ウォーキング協会 (250名)
- 【小・中学校】** 明治学院中学校 (49名) / 駿台甲府中学校 2年生 (80名) / 成城中学校 (32名) / 立教新座中学校 1年生 (39名) / 千代田区立お茶の水小学校 (48名)
- 【高等学校】** 東京都立田柄高等学校 (160名) / 松商学園高等学校 (80名) / 筑波大学附属桐が丘特別支援学校 (7名) / 拓殖大学第一高等学校 図書委員会 (6名) / 富山県立小杉高等学校 (28名) / 新潟県立新発田高等学校 (9名) / 浜松修学舎高等学校 1年生 (20名) / 専門学校東京ネットウェイブ高等部 (15名) / 宮城県泉高等学校 2年生 (3名) / 公文国際学園 3年生 (22名) / 国本女子高等学校 2年生 (23名)
- 【大学・大学院・専門学校】**  
サンパウロ大学法学部 (20名) / 明治大学 Law in Japan Program (30名) / 神戸学院大学佐藤ゼミ (17名) / 東北学院大学遠藤ゼミ (19名) / 福岡大学法学部「基礎ゼミ」(11名) / 韓国大学生訪日研修団 (30名) / 明治大学文学部演習I (野尻ゼミ) (15名) / 放送大学熟年会 (15名)

## M2 カタログ

## 「ふせん内藤家(ウサギ)」 「ふせん内藤家(翁)」 大好評販売中!!

2014年秋に行われた特別展「藩領と江戸藩邸—内藤家文書の描く 磐城平、延岡、江戸—」を記念し、M2ショップでは新しく内藤家の印章と文書をモチーフに2種類のおふせんを販売しています。可愛らしいウサギの印章を用いた書簡風おふせんは、書く面が大きく、メモにも最適。翁を用いた和書風おふせんは2種類のデザインに加えたっぶり90枚入り。また、各100円と、お手頃価格でお土産として大変好評です。是非お手に取ってご覧ください。



ふせん内藤家(ウサギ・翁) 各100円

## 博物館友の会活動の紹介

明治大学博物館友の会は、博物館のサポートとより良い生涯学習を願う人の集まりです。2015年1月現在470名余の会員を擁し各種活動を活発に行っています。今回は分科会活動の紹介です。

### ■分科会活動

友の会会員が興味のある事に対して、自主的に学習会を開催しているグループ活動です。現在10の分科会があります。多くの分科会は月1回、博物館教室や会議室で学習会を開催しています。分科会への参加は友の会に入会いただければどなたでも参加できます。(ただし、現在一部の分科会では募集を行っていない会があります)

### ■各分科会のご案内

- |                 |   |
|-----------------|---|
| ・古文書を読む会        | 例会：毎月第3月曜日 13時30分～15時                       |
| ・平成内藤家文書研究会     | 例会：毎月第2月曜日 13時15分～15時40分                    |
| ・古文書の基礎を学ぶ会     | 例会：毎月第1月曜日 1部 10時30分～12時 / 2部 13時30分～15時30分 |
| ・工芸の会           | 例会：毎月第2木曜日 13時30分～15時30分                    |
| ・旧石器・縄文文化研究会    | 例会：毎月第4木曜日 14時～16時 (8月休み)                   |
| ・弥生文化研究会        | 例会：毎月第2水曜日 13時30分～16時30分                    |
| ・東アジアの中の古代日本研究会 | 例会：毎月第4金曜日 14時～16時30分                       |
| ・前方後円墳研究会       | 例会：毎月第2金曜日 14時～16時30分                       |
| ・「倭国から大和」を学ぶ会   | 例会：毎月第3木曜日 14時～16時                          |
| ・古代東北アジアと日本研究会  | 例会：毎月第3木曜日 10時～12時                          |

### 【友の会の年会費】

- ・入会金：なし
- ・一般会員：3,000円
- ・家族会員：1,500円 (一般会員と同一住所の方)
- ・学生会員：1,500円 (現役大学生、高校生、専門学校生)

### 【明治大学博物館友の会 連絡先】

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1  
明治大学博物館 友の会宛  
メールアドレス [meihakutomonokai@yahoo.co.jp](mailto:meihakutomonokai@yahoo.co.jp)  
※博物館に友の会の担当者は常駐しておりません。  
連絡は必ずハガキまたはEメールをお願いします。

### 友の会への申込方法および分科会活動の詳細について

詳しくは明治大学博物館に備えています「入会のご案内」「分科会のご案内」または明治大学博物館ホームページから明治大学博物館友の会のページをご参照ください。

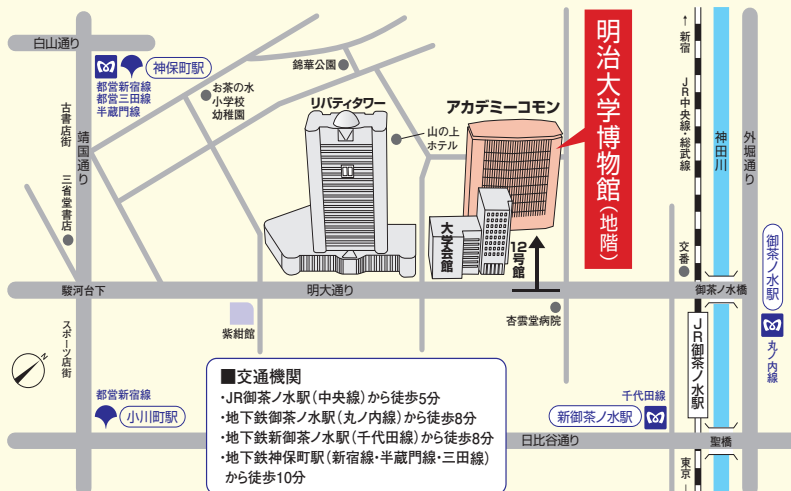
## 博物館案内

### 博物館案内

- ◆開館時間  
10:00～17:00(入館16:30まで)
- ◆休館日  
夏季休業日(8/10～8/16)  
冬季休業日(12/26～1/7)  
8月の土・日に臨時休館があります。
- ◆観覧料  
常設展無料。  
特別展は有料の場合があります。

### 図書室ご利用案内

- ◆開室時間  
月～土 10:00～16:30
- ◆閉室日  
日曜・祝日・大学が定める休日
- ※図書室はどなたでもご利用いただけます。
- ※蔵書は閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



### 編集後記

10年という大きな節目を越えた博物館12回目の春。研究機関として、生涯学習の場として、多くの方の憩いの場としてますます活用していただけるよう、これまでの研究成果を詰め込んだ博物館改修プロジェクトが動き出します。果たしてどんな風になるかな？